

追悼 学問と人生の師、福田晃先生

松本孝三

新しい年が明けて間もない令和四年（二〇二二）一月九日（日）、折しも衰えを見せぬ新型コロナウイルス禍の中、この日は午前中からオンライン方式で説話・伝承学会の冬季大会が開催されていた。午後からのシンポジウムが格段に面白く、「絵地図に描かれた空想の鳥々と伝承文学」をテーマに展開する各講師の話に引き込まれるように聞き入っていたところへ、午後三時過ぎ、真下厚氏から突然電話が入り、たった今福田先生が亡くなられたという。昨春秋以降、入院先の病院から御自宅に戻って療養を続けられていたこともあり、覚悟していたとはいえ、私は受話器を持っただけのまま暫し呆然と立ち尽くしたままであった。

福田先生はこれまで多くの学会の設立に中心的立場で携わって来られたが、中でも関西を基盤とした学会をと四十年前に創られたのがこの学会であった。その記念すべき第一回大会が昭和五十七年四月に同志社大学で開催され、私も研究発表の機会をいただいたことを今でも鮮明に覚えている。自ら手塩に掛けて育て上げた学会の最中に逝かれたことに私は強い衝撃を受けた。私にとっ

て先生は学問だけでなく人生の恩師であり、学生時代から続く先生との五十年にわたる研究会や学会活動を通しての関わりは、そのまま自分史をなぞることに繋がるのである。

福田先生が立命館大学へ赴任されたのは昭和四十六年（一九七二）春、先生はその時まだ四十歳を前の若さであった。学部の上級生になる私は、それまでの近代文学志向から中世文学を研究対象にしようと、前年度の途中から単位登録もまま北川忠彦先生の講義に潜入し、友人と先生の研究室へも出入りするようになり、厚かましくも能楽堂の能楽鑑賞券をただで頂戴したりしていたのであった。ところが、三回生の受講登録の時、いくら探しても北川先生のお名前が見当たらない。事務室で聞くと、先生はさる女子大学へ転勤され、中世文学担当は福田晃先生だという。ようやく研究目標を見つけたつもりだったのに、この時は途方に暮れてしまった。それでも一度中世文学をやると決めたことだし、女子大学へはさすがに潜り込めないで、中世文学関係の受講登

録を一通り済ませたのだったが、まさかこれが、私の人生を決定付ける出会いになるとはその時夢にも思わなかった。

その福田先生が、赴任されてすぐに学生たちに声を掛け、創設されたのが説話文学研究会である。日本文学専攻の学生十名ほどが参集し、私も迷わず参加した。その中には今もなお良き研究仲間である黄地百合子氏もいた。研究会の活動は説話文学の輪読と昔話の調査・研究の二本立てであった。その狙いは、記載された文芸と民間に語り継がれてきた民間文芸との関係から日本文学を根本的により深く捉えていこうとするものであった。

昔話調査は毎年、正月休みと夏季休暇を利用して各地へ出掛けたが、最も印象深いのは、初めての調査で出かけた徳島県海部郡海南町（当時）で、各地域の公民館に集まってくれたお年寄りから何一つ昔話が聞けず、打ち拉がれ、宿泊所前の海をじっと見つめながらいつまでも中に入ろうとしない私たちを見かねた先生が、一人一人に声を掛け励ましてくれたことであった。普段は厳しい印象の先生からは想像がつかないであろう。また、調査地では毎日、その日の報告会とその後の飲み会が恒例だったが、お酒が入るとその座はたちまち文化サロンに様変わりした。その折に先生が話されることは、取分け私にとって学問的な刺激と重要なヒントを与えてくれるものであった。社会人になると、さらに南西諸島の奄美・沖縄地方へと地域は広がって行ったが、採訪調査は待ち遠しく、毎年、夏休みが楽しみで仕方なかった。

昔話の報告書も、調査地の方々へのお返しだからと先生から指導されてきたのであるが、学部時代はその印刷・製本作業自体がガリ版刷りの手作業で、相当のエネルギーを要し、調査などよりも余程重労働であった。その後、タイプ印刷になったが、それでも録音テープの翻字から始まって、山積みの本文原稿の分類や解説などやるべきことは多かった。しかし、その苦労の積み重ねがその後の私の昔話研究において、資料の読み込みや活用などに大いに役立ったのもまた事実である。

私たちが昔話調査を始めた頃は大学を中心とした調査が盛んな時代で、その報告書類も多かった。東京などで開かれる研究会に出掛けると、ガリ版刷りやタイプ印刷の私家版の報告書が必ずと言っていいほど種類か並べられていたものだ。それらを片っ端から買い求めたように記憶する。わが書棚の一角を占拠しているそれらの資料群は、今も原稿を書く時に活用している。残念ながら今日、関連する学会に出かけてもほとんどそういった光景を見かけなくなつたし、書籍販売すら認めない会場などとも増えているのが現状のようである。つくづく昨今の学会を取り巻く状況の変化を感じずにはいられない。

それにしても、先生のお話はいつも大変わかりやすく、まるで聞かざるを無理へと導いてくれる「魔術師」のようであった。研究会や学会の折など、発表者の内容がよくわからない時でも、先生が発表者に質問されることで却ってその内容や問題点をはっきり

と理解できることが多々あった。また、お話好きの先生が折に触れて話される話題は何度聞いても面白かったし、一方で先生は聞き上手でもあったので、そのまま『宇治大納言物語』の作者に擬せられた源隆国のように私には思えてならなかった。まさに後世に残るほどのハナシの担い手になるようなお人柄であったと言えようか。正直言って私などは、先生のされるお話の面白さに今まで魅せられ続けて来たようにも思うのである。

令和四年の一月、先生は満年齢で卒寿を迎えられるはずであったが、残念なことに、あと二週間程で誕生日という時に逝ってしまったのである。あたかも、今年は柳田國男没後六十年にあたる。私は若い頃、生意気にも福田先生に向かって、「先生、柳田國男よりも長く生きてください」と言っていたように記憶するが、その柳田を超える年齢を先生は確かに生きられたのである。しかも、伝承文学研究者としての大きな足跡を残して。しかしながら、教え子としてはそんなことより、今は一日でも長く生きてほしかったとの思いのほうが強い。

福田先生の学問の業績は生涯をかけた「伝承研究」にあり、「伝承」の有する普遍性を、日本文学のみならず、わが国の文化全般にまで推し進め、そこに人間存在に対する本質的な意味を見出し、文学的営みとして位置付けようとしたものと言えよう。それを私は「福田伝承学」と称することにしたい。先生はその伝承学の構築のために、お体が動く限り最後までフィールドワークを

重んじて来られたのである。次頁に掲載した写真も、七年前、実際に大分県で津島神楽を見学された際の一枚である。思うにその姿勢は、先生の恩師である國學院大學の白田甚五郎氏が提唱された実感・実証の学によって培われたものであろうし、昔話に関して言えば、先生ご自身は昔話民俗記の構築を生涯の目標として来られたのである。

昨年、先生はご自身の死期を悟ったかのように、これまでのご研究の集大成として、二冊の大作の企画を真下厚氏と私に伝えられた。そして、その全体の校正を私たち二人に託されたのであった。一つは『英雄伝承の誕生―蒙古襲来の時代―』（令和三年十一月、三弥井書店刊）で、こちらを私が担当し、もう一冊は『日本と「琉球」―南島説話の展望―』（令和四年一月、法蔵館刊）で、真下氏が担当した。いずれも五百頁にならんとする文字通りの大作である。

最初のうちは先生ご自身で校正を最後までやるご意向であり、私たちはそのお手伝いのつもりであったのであるが、先生の体力が秋以降次第にその作業に耐えられなくなってゆき、結局は二冊とも我々二人で完成までのすべてを担うことになったのであった。取載論文は、お体を悪くされた時期に書かれたものが多いこともあってか、本文中の引用文献や注釈などに予想外の修正箇所があり、その校正が大変だったのは事実であるが、その論調・論旨はいつものようにきわめて明晰であった。二冊とも年内には完成し、先生はそれを手に取って大層喜んで下さり、最期まで枕辺

から片時も離さなかったと奥様からうかがった。私が担当した『英雄伝承の誕生―蒙古襲来の時代―』の跋文で先生から「持つべきものは教え子」と、過分なお言葉までいただいた。教え子としてこれ以上の幸せはない。

ところで、昨年の九月、先生と電話で著作の校正作業の打ち合わせをしていた時、話が新型コロナウイルスに及び、私がワクチン接種をしていないと言うと、何と「それではおれの葬儀に来られないぞ」と叱られた。これが先生からの叱り納めとなってしまう。その後、接種は受けたが、これまで、福田先生の導きのエネルギーによって何とか少しでも学問の大空へ羽ばたくことができた私にとっては、コロナ禍のために先生と飲む機会を奪われたこの二年間が本当に悔やまれる。もう少しこちらで頑張りたいので、先生との楽しい歓談はいずれということで、今は心からご冥福をお祈りしたいと思う。

(まつもと・こうぞう)



2015年(平成27)年10月10日、大分県日出町の津島^{ひじま}神楽見学において、立命館アジア太平洋大学の学生さんたちを前に笑顔で解説をされる福田晃先生。左は先生の教え子である同大学の金賞會教授。